

特別な配慮を要する児童の運動部活動参加についての研究

－熊本県内小学校運動部活動の社会体育移行を見据えて－

大杉 成喜・今田 直人*

A study on participation of children with special needs in athletic activities at elementary schools: In light of promoting the physical education and sports in the community in Kumamoto Prefecture

Nariki OSUGI and Naoto IMADA

(Received September 30, 2016)

Key words : Children with Special Needs, Athletic Activities, Elementary Schools

I. 問題と目的

1. 熊本県の小学校運動部活動の転換

2014年9月、熊本県教育委員会はこれまでの小学校運動部活動を、外部組織が運営する「社会体育」へ移行する方針を発表した。翌2015年3月「児童生徒のための運動部活動及びスポーツ活動の基本方針」により具体的な計画が示された。基本方針1では「小学校の運動部活動は社会体育へ移行」「移行期間を4年間とし、平成30年度末には各市町村において達成できるようにする。」とした。

基本方針4では、「指導者の資質向上研修会及び講習会の実施」として、指導に必要な知識や技能等についての研修会を行うよう記された。そこでは、「…(略)科学的な研究により理論づけられたもの、研究の結果や数値などで科学的根拠が得られたもの、新たに開発されたものなどを活用する。」と述べられた。その例として、「多様な能力やニーズに対する指導法について」という記述もあり、競技力そのものの科学的根拠に基づいた効果的な指導のみならず、発達障害をはじめ配慮を要する児童を含めた児童理解についても研修が必要であると考えられる。

2. 運動部活動の意義と歴史的変遷

小学校運動部活動について整理する。

中学校学習指導要領によると、部活動は「スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と記されているが、小学校学習指導要領において記述はない。

運動部活動の意義としては、からだの発育を考慮した学校種別の運動部活動が考えられる。国土(2014)は小学校における運動部活動では「動きの巧みさを身につけるのに最も適している」とし、「難しい技能や動きを達成する喜びを経験させることが必要である。この達成の課程には『できない』ことに直面しそれを不快であると表現する子どももいるが、これも重要な経験であり、動きを達成させるには、教師や指導者のサポートが必要である。」と述べている。様々な発達段階にある児童の運動技能向上のためには指導者の適切な指導が大切であり、個々の状況によっても対応する必要がある。特に運動の巧緻性に難しさのある児童が多い発達障害の児童には、全体指導にとどまらず、個の特性に応じた指導が重要になる。

熊本県内の運動部活動の歴史では、45年前に学校体育から社会体育への移行が形づけられていた(県教委「児童・生徒の体育スポーツ活動について」1970年通達)。熊本県体育史(1988)によると、この時の社会体育への移行はその後、「市内の中学校における活動中の事故の判決(1970年)を受け、また教師の勤務時間の関係や損害賠償の判例、過剰な対外試合や勝敗へのこだわり、多額の経費などの教育上望ましくない結果の招来、といった様々な要素が関係していた。」と記されており、様々な問題が生じていたことがわかる。しかしながら、全国に先駆けて社会体育化に取り組んだ熊本では、小学校でも同様に部活動を社会体育として八代地域や宇城地域などで発展させていった(新熊本の体力2014)歴史があった。

しかし、その通達から8年後、再び学校体育への回帰(1978)をたどった。これは①教員特殊業務手当の運用、

* 熊本県八代市立太田郷小学校

②日本学校安全会法の改正, ③運動部活動が教育活動として位置づけられた, といった3点の理由からだった(新熊本の体力2014)。これらの流れを受け, 小学校も同様に学校単位のいわゆる「部活動」として展開していくことになる。そして今回, 少子化に伴うチーム編成の困難さやニーズの多様化, 指導者教員不足などの課題を背景に, 2019年に再び社会体育への移行という変遷をたどる。

このように「小学校の運動部活動」という形態は熊本独特のシステムであり, 現在に至ったと考えられる。これに対し他県は小学生のスポーツについては1962年発足のスポーツ少年団としての活動が結成以来継続しており, 近年では「スポーツ少年団と目指す理念が一致する総合型地域スポーツクラブ(大橋, 2001)」との連携で, その機能を拡充していく流れとなっている。

3. 総合型地域スポーツクラブ活動の現状

櫻井(2012)は総合型地域スポーツクラブを, 「種目やチーム, 年代の枠を超えた一つのクラブとして, 子どもから高齢者, 障害者も含め, 誰もが生涯にわたってスポーツに親しむシステム」と述べている。しかしながら, 「地域の高齢者や障害者と交流を行っているか?」との質問に対し, 90.07%のクラブが「いいえ」の回答を示しており, 障害に対する情報の薄さもあげられる(櫻井, 2012)。「はい」と回答しているところでも, 施設への慰問や障害者マラソン大会での交流が挙げられたくらいであった。

次に小学生のスポーツ活動について, 障害のある児童の参加状況について述べる。日本スポーツ少年団「第9次育成5か年計画」の報告に, 「単位スポーツ少年団における障害のある子どもの参加実態調査報告書(2015)」がある。スポーツ少年団で参加・活動している「障がいのある子どもの参加状況」は, 多くが健常児の活動に障害のある子どもの参加がみられ, 在籍の半数以上54.7%が発達障害(ここではアスペルガー症候群, ADHD, 学習障がいなどの分類)の児童という調査結果が出ている。次に多いのが聴覚障害(18.7%), 以下, 肢体不自由(12.0%), 知的障害(9.3%)だった。スポーツが身体の動きを伴うという特性から, 他の障害種より動きが活発な児童の多い「発達障害」の児童が圧倒的に多く在籍しているのがわかる。

しかし, 指導者に目を向けてみると, 報告書では日本体育協会の登録指導者のうち, 日本障がい者スポーツ協会の資格を持っている指導者数は81.8%の団が0人と回答している。指導者のいるスポーツ少年団においても, 実際には, 発達障害をはじめ様々な配慮の必要な児童への指導にあたって, その指導者に対する研修や情報提供などが行われていないまま, 指導が行われている現状が浮かんてくる。

この報告書では「障がいの種類に対してだけではなく

個々に応じたサポート体制を全体で検討できるような取り組みが望まれる。」と結んでおり, 指導者への研修の必要性はうたっているものの, 具体的には「これから研究していく分野」となっている。これらの報告から, 全国的にも発達障害をはじめ配慮の必要な児童への指導にあたって, 指導者への情報提供(研修)は皆無に近い状態であることがうかがえる。

毎年行われている, 熊本県体育協会が開催する指導者講習会の中でも, 「発達障害をはじめとする障がいのある方への指導」という視点での研修会は資料が残っている1998年以降, 一度も実施されていない(※県体協資料)。

4. 本研究の目的

熊本県では「小学校の運動部活動」はこれまで学校職員主体で運営・指導してきた。今回の社会体育化への方針に伴い, その移行期間(～平成30年度末)を含め, 移行後も, 地域の指導者(外部指導者)による指導や運営の中で, 特に, 「発達障害をはじめ支援を要する児童に対する指導」という点で混乱が起きるのではないかと予想した。

本研究では, 学校職員としての指導者と外部指導者に調査を行い, 外部指導者の方々の「発達障害」等に対する理解についての現状を明らかにするとともに, 特別支援教育の周知すべきことを整理したい。

また, モデルケースとして一つのスポーツクラブ(C小学校運動部活動)の外部指導者に発達障害等に関する研修を行う。この研修を通して, これまでの指導の振り返り, 指導の工夫改善, 配慮を要する児童が生き生きと参加できる部活動(スポーツクラブ)のありかたを考える。

最後に特別支援学級児童を対象とした日本で唯一のスポーツ少年団を訪問調査し, その理念, 配慮点, 指導者の考え等を聞き取り, 発達障害のある児童の理解と運動部活動指導のありかたについて考察する。

II. 方法

1. アンケート調査

1) 対象

小学校の運動部活動指導者(外部指導者含む)

2) 手続き

2015年9月下旬から10月中旬, 熊本県内の県南地域(八代, 芦北, 球磨)の各市町村教育長の決裁を経て80校へ配布した。小学校運動部活動の直接指導に携わる指導者全員(学校職員と外部指導者)に記入を依頼した。

3) 調査内容

質問項目「フェイスシート」, 「児童の実態把握の方法」, 「発達障害に関する知識・経験」, 「児童への対応の仕方」を設定した。(資料1)

4) 分析方法

「学校職員群」, 「外部指導者群」の比較分析には, 「Excel アンケート太閤V.5」を, 項目ごとの分析は統計解析ソフト js-STAR を用いた. 自由記述の回答は, KJ法を用いて著者によりカテゴリー別に分類し整理した.

2. 外部指導者の研修の実施

1) 研修の試行

C小学校多目的室にて, C小学校運動部活動外部指導者(6つの部: 11名)に向けて2015年10月19日(サッカー部, 陸上部, バドミントン部), 20日(野球部, ミニバスケットボール部, バレーボール部)に, 部活動指導後に発達障害に関する情報提供(研修)を実施した. 内容は, 発達障害全般の理解や運動部活動時等での指導にあたっての工夫例などについて講義形式で実施した.

2) 研修後の聞き取り調査

12月中旬, 情報提供(研修)を実施した部活動指導者に, その後の自分の指導に際して「工夫したり配慮したりしたことはあったか」, また「児童に変容が見られる場面はあったか」, などを半構造化面接により明らかにした. 聞き取りに関しては, 研修に参加した指導者11名のうち9名から聞き取りが得られた. 質問内容は資料2に示す.

3. 特別支援教育学級児童を対象にしたスポーツ少年団指導者へのインタビュー調査

12月初旬, 日本で唯一, スポーツ少年団として特別支援学級に通う小中学生を対象として結成されている「竹の子プレイスクールスポーツ少年団」の代表田中友治氏へのインタビュー調査を実施した. クラブ設立の経緯や運営及び活動内容, さらに, 指導者としての配慮点やこれまでの苦労などを半構造化面接にて聞き取り調査を行い, 熊本県における今後の発達障害児の部活動参加についての提言をいただいた.

Ⅲ 結果

1. アンケート調査

80の小学校のうち, 72校から回答があった(回収率90.0%). 有効回答数は475で, 「当該学校職員: A群」411名, 「地域の指導者(外部指導者): B群」64名であった. 小学校単位で活動している部活動であるために, B群の指導者は学校によっては委嘱していないところもあり, 総数に差がみられた.

主要な項目についてはFig.1~2, Table1に示す.

回答があった自由記述について「学校職員」「外部指導者」の両カテゴリー別に分類・整理した結果をTable4に示す.

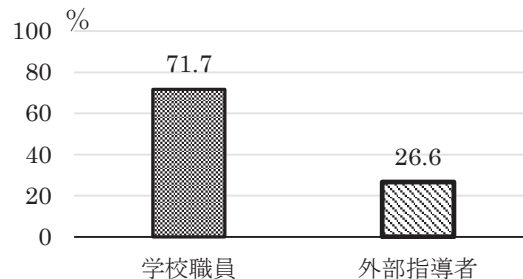


Fig.1 担任よりの情報提供有りの割合

Table1 どのような形で担任より情報提供があったか				
	文書	口頭	文書+詳しい説明	その他
A群 (n=294)	1.7%	82.3%	14.3%	1.7%
B群 (n=17)	5.9%	82.3%	11.8%	0%



Fig.2 保護者からの情報提供有りの割合

Table2 どのような形で保護者から情報提供があったか				
	文書	口頭	文書+詳しい説明	その他
A群 (n=116)	2.5%	84.8%	11.9%	0.8%
B群 (n=12)	8.3%	75.5%	8.3%	8.3%

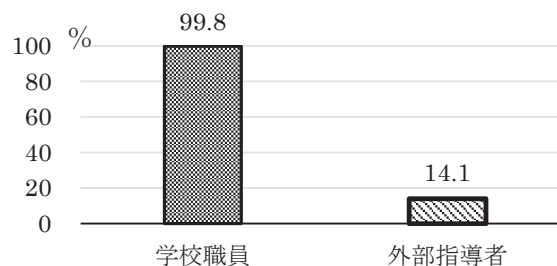


Fig.3 学びの機会への参加経験があると回答した割合

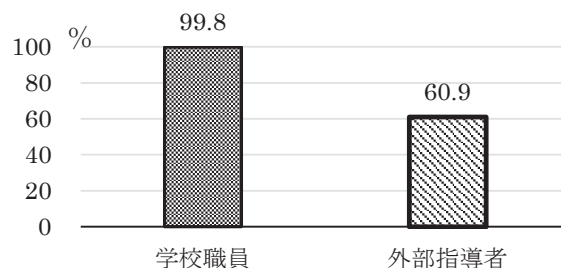


Fig.4 言葉を聞いたことがあると回答した割合

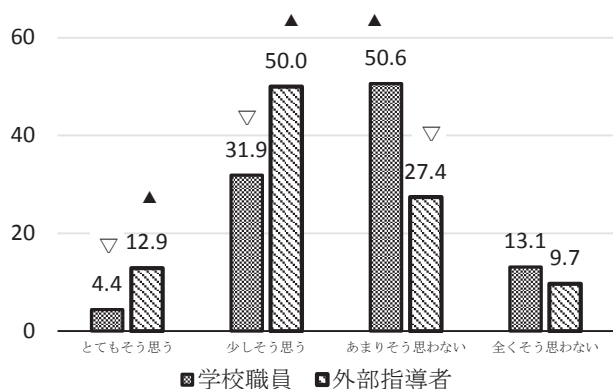


Fig. 5 忘れ物には毎回強く言い聞かせる方がよい
(▲有意に多い, ▽有意に少ない p<.05)

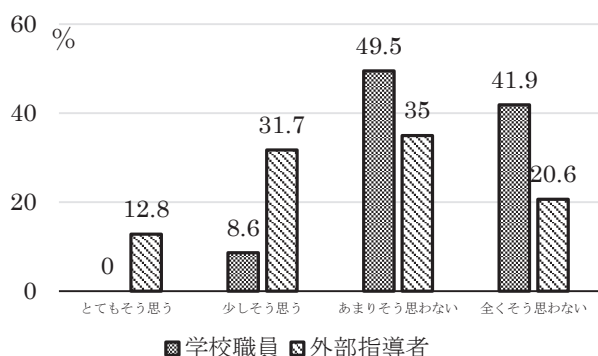


Fig. 6 保護者への要求・家庭環境やしつけの問題
(全ての項目に有意差あり p<.05)

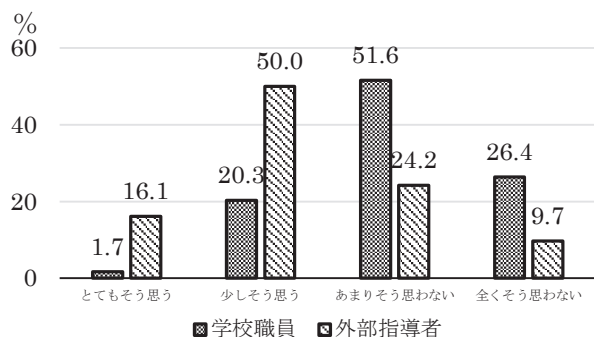


Fig. 7 部活動では厳しい対応をした方がよい
(全ての項目に有意差あり, p<.05)

自由記述をKJ法で分類した結果(Table4), 「連携・話し合い・共通理解」に関することを記述した回答が両群とも4割を超えた。しかし, 「研修の必要性」ではA群の方が高い割合を占め, 「指導への不安・勝利至上主義の心配」と, 「個人情報保護(守秘義務)の心配」については, B群では0%であった。

2. 外部指導者への研修の試行後のインタビュー

表1で示した質問項目で, 研修後の様子を指導者9名にインタビューした結果, 「言葉遣いを丁寧に」や「説明をゆっくり詳しく」などを意識するようになったり, 児童の変容では「集合が早くなった」や「子どもたちも暴言を

Table3 自由記述の分類結果

カテゴリー分け	
A群(n=245)	B群(n=27)
連携・話し合い・共通理解について	
42.4%	40.7%
研修の必要性について	
20.8%	7.4%
指導への不安・勝利至上主義の心配	
9.8%	0%
指導者の確保の心配	
5.3%	7.4%
児童の特性を理解しての指導について	
4.9%	3.7%
個人情報保護(守秘義務)の心配	
2.9%	0%
特別なにもしない	
1.0%	7.4%
その他	
13.1%	33.3%

言わなくなった」などの変化を感じたりする回答を得た。受けた研修に関しては, 「わかりやすかった」と評価していただき, スライドの細かい部分まで覚えていて, 自分を振り返る回答を寄せていたものもあった。また「定期的にこのような話を聞く機会がほしい」という回答もあった。

IV 考察

本研究では平成30年度の小学校運動部活動社会体育移行を見据えて, 特別支援教育の視点から, 現状として熊本県内で展開されている小学校運動部活動についての現状を調査した。

第1研究として部活動に指導者として関わっている人にアンケートを取り, 学校職員以外の指導者(外部指導者)の発達障害をはじめとする特別な配慮を要する児童への指導について, その認識度を明らかにするとともに, 児童についての情報の共有方法や, 指導にあたっての考え, 対応方法などを学校職員と比較検討した。

第2研究として, 一つの小学校運動部活動をモデルに, 外部指導者に向けて「発達障害についての情報提供会」として, 発達障害についての基本的な内容ふまえた研修を行った。その後, 2か月ほど経って各外部指導者にインタビューを行い, 研修の有効性や指導現場での実効性を検証した。

1. アンケート結果より

「児童の実態把握の方法」について, 児童の様子を知る方法としては, 保護者よりも担任の先生からの情報提供が多かった(Fig.1)。これまで学校内の部活動として機能していることもあり, 各部には学校職員が何らかの形で関わっている。部活動の場面だけでなく普段の生活

場面でも話す機会がある学校職員同士のため、児童の様子を共有しやすい。このことは、今後社会体育化して学校（担任）から離れての活動となったときに、特別な配慮を要する児童についての情報の伝達が難しくなり、児童に応じた指導が難しくなることも考えられる。情報提供の形としては「担任から」、「保護者から」ともに、口頭での情報提供がほとんどであった（Table1, Table 2）。伝達の過程で不確実な伝わり方をする可能性もある。

「発達障害に関する知識・経験」について尋ねた各項目では、発達障害をはじめ、特別支援教育に関する研修会や学びの場への参加状況は、明らかな差が出た（Fig. 3）。A群は校内研修をはじめ、年間通して様々な研修の機会があり、校内研修だけでなく、長期休業日や休日を利用して自主的に参加しているものも多い。B群ではその機会や啓発に応じる場が少なく、参加したことがない指導者が多数を占めた。アスペルガー障害や高機能自閉症など「発達障害に関わる言葉を聞いたことがあるか」の質問でも両群に有意な差があった（Fig. 4）。発達障害については近年、新聞・テレビなどマスコミでも取り上げられることが多くなったが、内容まで踏み込んで聞いたり調べたりすることもないためと思われる。また、「配慮を要する児童が在籍したことがあるか」の質問においてA群71.9%、B群28.6%と差が出たことから、児童に対する「気付き」の部分で大きな違いがあることがわかる。「知らない」ということで、気付きができず、今後も普通の指導を繰り返していく可能性がある。

具体的事例に関して対応を4件法で尋ねた項目では、「毎回強く言う」や「家庭環境に問題があるため保護者に強く要求する」、「厳しい対応」といった項目において、両群で有意な差がみられた（Fig. 5, Fig. 6, Fig. 7）。依然として児童や保護者への責任と考えている現状が浮かんできた。

しかし反面、「力づくでおさえる」や「何度もやらせたり罰を与えたりする」という項目に関しては、両群に有意な差が見られなかった。これは、B群指導者もこれまでの指導の中で培ってきた各自のノウハウを持ち合わせていることや、いわゆる「体罰」についてマスコミを含め様々な場面で話題になっていることで否定的な回答を示したものである。

自由記述の「社会体育化していく上で、配慮を要する児童への理解や指導についての考え（Table3）」では、両群とも「連携・話し合い・共通理解」についての記述があり、その必要性を感じている。藤田（2008）は、発達障害児の運動指導上の留意点7カ条として、第1番目に「情報蓄積、情報交換する中で指導方針を決めていくことが大切」と述べており、「家族からの情報を得ることの大切さ」についても後述している。自由記述の「連携・話し合い・共通理解」の大切さの認識と一致している。しかしながら、実

際のところアンケート調査から「保護者からの情報提供」については両群とも割合は低く、保護者からは伝わっていない（伝える機会がない）ことがわかった。学校現場を離れることで、児童の様子を伝えるための方法が更に狭まってくるものと考えられる。

次に、記載している人のうち、研修の必要性があると回答している人がA群で20.8%おり（B群7.4%）、実際に毎年のように特別支援教育に関する研修を受けているA群はその必要性を強く感じているものといえる。特別な配慮を要する児童について、「知らない」ということによる不適切な要求や対応、それに伴って行動上の問題が生じることでの混乱、収集のための活動の滞り等、悪循環に陥ってしまうことが予想できる。

また、「指導や勝利至上主義への不安」を感じている指導者はA群が9.8%いたのに対し、B群では0%であったことからA群は競技力向上よりも、活動が過熱して児童への負担が増したり、運動の楽しさを見失ったりすることへの心配していることがわかる。熊本県の小学校運動部活動が学校部活動から社会体育、社会体育から学校部活動へ、そして今回の社会体育移行という歴史的背景（新熊本の体力2014）を考慮した考えであるともいえる。

一方、両群とも「指導者確保への懸念」についてはA群で5.3%、B群で7.4%と同程度の回答があった。配慮を要する児童への個別の対応に時間をとられる場合、全体の指導が滞ってしまい、活動そのものが止まってしまうこともある。どの子にも活動を保障する環境をつくるためにも発達障害を含めた配慮を要する児童についてわかる指導者を含めた複数の指導者が必要といえる。

自由記述欄では他にも、A群で「個人情報への不安（守秘義務）」のこともについても心配する記載があった。B群の指導者に児童の個人的な配慮事項などの情報を伝えることで、指導に生かされていくという反面、近年学校現場で注意や配慮している「個人情報の守秘義務」といった点も問題になってくる。

地方公務員法第34条1項に、「職員は、職務上知りえた秘密を漏らしてはならない。その職を退いた後も、また、同様とする」とある。いわゆる「守秘義務」とは、「秘密を守る義務。公務員・医師・弁護士など、一定の者が職務上知った秘密を守るべき法律上の義務。漏らせば処罰される。（広辞苑第5版 岩波書店）」とあるように、対象は教師を含む公務員や職業柄個人の秘密を知りうる立場の者への義務である。部活動の（外部）指導者は様々な職種の人たちで構成されており、適応の範囲は厳密にいえば曖昧である。しかしながら指導者という立場で考えると、学校職員同様の義務が発生すると思われる。これまで教師が把握し、対応していた部分を外部指導者が担うことになる。これまではいわゆる「暗黙の了解」的な風土があり、実際に守秘義務の件で表立ってトラブルになっ

た例は見当たらない。この点についても指導者全体が意識できるような研修の機会が必要であるといえる。

2. 外部指導者への研修試行後のインタビュー調査より

C小学校でもアンケート調査と同様、外部指導者の方々は発達障害をはじめ特別支援教育に関する研修や学びの場に参加したことがある人はいなかった。あわせて、発達障害に関する用語（高機能自閉症、アスペルガー障害、ADHD など）をはじめて聞いたという指導者が半数を超えていた。しかしその後、C小学校外部指導者に発達障害についての情報提供を行い、2か月後に研修後の指導についてインタビューを取ってみたが、「資料(スライド)がわかりやすかった」や「変わらないといけないと思った」など肯定的にとらえた感想がみられた。

その後の指導においては「スケジュールを提示するようになった」や「言葉遣いをわかりやすく、ゆっくり話す」、「一人一人に応じた話し方を心がける」などといった“できること”から取り組みを始められた。工夫したことによる児童の変化について「集合が早くなった」や、「何度も説明しなくてよくなった」といった肯定的な変化についても回答を得ることができた。

これまでほとんど意識していなかった部分に「情報提供」という形で配慮を要する児童の対応について提示したことによって、視点が向きやすくなったと思われる。「自分も少し子どもに対して怒らなくなった」という、いい循環が生じていると思われる。

また、C小学校の指導者は2か月前に発達障害に関する研修を受けたことで、その必要性を直接感じている回答も寄せられている。「知ること」の重要性が裏付けられたといえる。今回モデルケースとして一つのスポーツクラブを対象に発達障害についての研修を行った。指導者の中には今回のような研修の機会を得たことをとても喜び、定期的に開かれることを望んでいる人もいる。「知らない」ということで児童も指導者も、保護者も悲しい思いをしなくていいように、児童に関わる指導者への研修制度が充実できればと考える。

3. スポーツ少年団指導者へのインタビュー調査より

日本で唯一の特別支援学級の児童を主な対象とした北九州のスポーツ少年団「竹の子プレイスクール」代表の田中友治氏は、聞き取り調査の中で、自身のドイツへの研修視察で学んだことを基に、特別支援教育の対象となる児童生徒のスポーツ活動の必要性を述べている。田中氏は2006年「日独スポーツ少年団同時交流」の日本派遣団団長として、「ドイツにおけるハンディキャップのある子どものスポーツ活動」をテーマに視察され、環境面や人的な手厚さなど、障がいのある子どもたちがスポーツを楽しむための受け皿があることに驚かれたという。その後、独

自で「既存のクラブに障害のある子どもが入部を希望したときに受け入れてくれますか？」という調査をされた時に、「何かあったときの責任論」や、「指導したことがない」といった後ろ向きの返事がほとんどであった。「知らないから」という理由も多い。このようなことを踏まえ、田中氏は、日本の少年スポーツの現状を鑑み、今後、スポーツ少年団の資格取得のシステムの中に発達障害をはじめ、障害のある児童についての研修プログラムの必要性を述べている。福岡県のスポーツ指導者本部長として、「指導者研修会の中にある程度基礎的な障害のある子どもについての内容を入れていくべきであり、資格認定講習会の中にも盛り込んでいくことで指導者の認識も変わってくるのではないかな。また、年に1回の指導者研修会の中でも、数年に一度は取り扱うべきだ。」とも述べている。

4. 総合考察

スポーツ指導者への研修の機会となると、熊本県では体育協会が主催する「熊本県公認スポーツ指導者研修会」がある。1988年以降、講演や研究討議など様々なプログラムが行われてきているが、障害のある人を対象にした内容は取り扱っていない。このことは、県の基本方針4の「指導者の資質向上研修会及び講習会の実施」において、競技の技術的研修だけでなく発達障害をはじめとした研修もそのプログラムの柱の一つとして、同様に組んでいくことが大切であるといえる。

中島ら(2012)は、「発達障害児にとって運動は楽しいものである。」と述べ、さらに、「楽しみながらできる運動は、児童の気持ちを肯定的なものへと変化させる効果があり、達成感を味わったり対人関係を改善したりすることにも有効である」と述べている。これは、「スポーツ活動を通じて自信をつけることが必要であり、我々は後押しをしてやる。それが将来社会に出た時に自分から積極的に取り組もうとすることに繋がっていく。一つ一つ時間をかけてじっくり待ち、個人差に応じた指導をしていくことで小さな自信の積み重ねがあり、将来何かをするときに生きてくる。」と田中氏が述べていることと重なってくる。強制的ではなく自主的に入部する部活動だからこそ、特別な配慮を要する児童にとって楽しみながら活動し、小さなステップを一つずつ上がる経験の繰り返しを通して自信をつけることが大切といえる。指導者の発達障害を含めた特別支援教育への理解が必要で、「知らない」という回答が多かった外部指導者への研修として、特別支援教育に関することも取り入れる必要がある。

アンケート調査の自由記述欄にも見られた、「指導者の確保」ということについても、田中氏は、「地域ごとに人材バンクのようなシステムを構築する必要があり、退職した人や一緒に遊んでくれる感覚で女性の方にも呼び掛

外部指導者へ向けた研修会の開催については、青柳ら（2014）は、「指導者の成長や人脈獲得のニーズを満たすためにも、他の指導者との交流を通して知識やスキルの獲得を後押しするワークショップ型の指導者講習会などの企画が効果的である．」と述べている．競技力向上や組織運営についての研修会という点では有効であると思われるが、特別な配慮を要する児童への対応といった点では、アンケート調査や聞き取り調査の結果から、外部指導者については経験や知識、対応の方法等周知がなされていない段階であることが明らかになったため、「ワークショップ型」で開催する前に、基本的な知識としての発達障害及び特別支援教育に関する情報提供的な講習（研修）が現段階では必要かつ有効である．

- 1) 青柳健隆・岡浩一朗 (2014) 運動部活動への外部指導者の活用方策. 体育の科学 64,NO4,256-260
- 2) 藤田紀昭 (2008) 障害者(アダプテッド)スポーツの世界. 角川学芸出版 170-171
- 3) 國土将平 (2014) からだの発達と運動部活動. 体育の科学 64,NO4,234-235
- 4) 熊本県教育委員会 (2015) 児童生徒のための運動部活動及びスポーツ活動の基本方針
- 5) 熊本日日新聞 (2014.9.3)
- 6) 熊本日日新聞 (2014) 新熊本の体力
- 7) 熊本日日新聞 (2015.12.22-29) 東京五輪への道程一熊本のいま. 第3部. 変わる放課後
- 8) 中学校学習指導要領解説 総則編 84-85
- 9) 中澤篤志 (2011) 学校運動部活動研究の動向・課題・展望: スポーツと教育の日本特殊的関係の探究に向けて. 一橋大学スポーツ研究 30,31-42
- 10) 中澤篤志 (2014) 運動部活動の歴史的変遷と「社会的意義」. 体育の科学 64,NO.4,226-230
- 11) 中島範子・松山郁夫・坂元康成・他著 (2012) 発達障害児の活動に運動処方を組み込む意義. 教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集 Vol.5no.2. 佐賀大学機関リポジトリ

- ☐ 文書による提供
 ☐ 口頭で説明
☐ 文書+詳しい口頭説明
 ☐ その他 ()

⑩「発達障害」や「特別支援教育」などについて、これまで研修や学びの機会に参加したことはありますか？

☐ある ☐ない

⑪今まで指導した部員で、特別支援教育の視点から特別な配慮を要する児童が在籍したことがありますか？

☐ある…⑫へ ☐ない…⑬へ

⑫どのようなお子さんでしたか？診断名や状態など、分かる範囲で教えてください。

()

⑬高機能自閉症、アスペルガー障害、ADHD などという言葉聞いたことがありますか？

☐ある ☐ない

⑭高機能自閉症、アスペルガー障害についてお尋ねします。部員の一人が高機能自閉症やアスペルガー障害と聞いた時、どういったことに配慮して指導しますか？

☐ () ☐分からない

⑮ADHD についてお尋ねします。部員の一人が ADHD と聞いた時、どういったことに配慮して指導しますか？

☐ () ☐分からない

※配慮が必要な児童についての考えをお聞かせください。

⑯忘れ物が多い児童がいたら、活動に支障が出るので、部活では毎回強く言い聞かせる方がよい。

☐とてもそう思う ☐少しそう思う
☐あまりそう思わない ☐全くそう思わない

⑰全体で今確認したこと（話したこと）をよく忘れていく（対応できない）児童に対しては、「これから先は一度しか言わない」と念を押し、それ以降言わない方が定着する。

☐とてもそう思う ☐少しそう思う
☐あまりそう思わない ☐全くそう思わない

⑱勝ちにこだわったり、あいまいな状況（ルールなど）が許せなかったりまたは突然友だちをたたいたりする児童がいた場合、それは家庭環境（しつけなど）が大きな要因と考えられるので、保護者に強く指導を要求したほうがよい。

☐とてもそう思う ☐少しそう思う
☐あまりそう思わない ☐全くそう思わない

⑲急な予定変更を嫌がったり、状況を把握せず心無い言葉を平気でかけたり、またみんながやっている活動を嫌がり参加しなかったりする児童がいた場合、部活動の中では、そのような児童には厳しい対応をした方がよい。

☐とてもそう思う ☐少しそう思う
☐あまりそう思わない ☐全くそう思わない

⑳突然泣き出したり機嫌が悪くなり友だちに手を出したりするなど、いわゆる「パニック状態」になり、ひどく不安定な状況になる児童がいた場合、他の子への活動が阻害されるので、力づくで落ち着くまで押さえていた方がよい。

☐とてもそう思う ☐少しそう思う
☐あまりそう思わない ☐全くそう思わない

㉑同じメニューを練習して周りの児童はできているのに、できないのは本人の努力不足の要因が大きいと考えられるので、定着のため、何度も繰り返し練習をしたり、ペナルティ（罰）を与えたりした方がよい。

☐とてもそう思う ☐少しそう思う
☐あまりそう思わない ☐全くそう思わない

㉒児童一人一人に対する指導（個別の指導）で、実際に対応に困ったことがありますか？

☐ある…㉓㉔へ ☐ない…㉕へ

㉓前設問で「ある」と答えた方へお尋ねします。

どのようなことで困りましたか？詳しく教えてください。

()

㉔その際、どのように対処（対応）をしましたか？

☐一人で対応した ☐指導者で協力して対応した
☐保護者に相談した ☐指導者以外の学校職員に相談した
☐その他 ()

㉕設問㉒で、「ない」と答えた方にお尋ねします。これまでに指導した特別な配慮を必要とする児童との関係を教えてください。

☐これまで対応はうまくいっている
☐出会ったことがない ☐その他 ()

㉖特別な配慮を要する児童について、個別の対応で困ったときに相談する人はいますか？

☐いる…㉗へ ☐いない…㉘へ

㉗相談する人がいると答えた方へお尋ねします。現時点では主に誰に相談しますか？一つお選びください。

☐同じ部の外部指導者 ☐同じ部の指導者（学校職員）
☐その児童が通う学校の先生 ☐その児童の保護者
☐その他 ()

㉘これから小学校部活動を社会体育化していく上で、特別な配慮を要する児童が入部してきた場合、児童理解や指導についてのお考えがあれば聞かせてください。

()

資料2：半構造化面接の質問項目

① 前回の研修ではじめて知ったことなどありましたら、教えてください。

② 研修を受けてみて、これまでの指導方法を工夫した点があれば教えてください。

③ 発達障害の児童への対応を実践されてみて、児童の様子に変化が見えてきた部分があったら教えてください。

④ 発達障害についての諸情報を得たことで、よかったこと・ためになったことを教えてください。

⑤ 社会体育化し、今の学校だけでなく様々な学校の児童と部を構成していくことになった場合、児童の様子・対応方法等どのように把握していけばいいか、お考えを聞かせてください。